

## 【vol.80】オルタード・スケールなどの特殊スケールを使う時

どうも、大沼です。

今回は、前回学んだ「オルタード・ドミナント・スケール」を含む、ちょっと特殊なスケールを『どういう時に使うのか?』と言う話ですね。

これは要するに、「いつ使うのか⇨コード進行」なわけですが、オルタードの事だけを言えば、一般的には、

『ドミナント・モーション(V-Iの進行)時の、V7のコード上で使う』

と言う話なので、前回の解説でほぼ完結しているのですが、実はその時、他にもスケールの選択肢があります。

この時、対象になるスケールは、「オルタード」、「ディミニッシュ」、「コンディミ」、「ホールトーン」、と言った所です。

後は、カテゴリーとしては、結局は、大方がV7(X7)のコード上で使う、ドミナント・スケールなので、ミクソリディアンとHmp5↓も含まれますね。

ドミナント・モーションにはメジャーキー時のもの(V7-I M7)と、マイナーキー時のもの(V7-I m7)がありますが、上記スケール群には、どちらでも使えるものと、そうでないものがあります。

これらのスケールの使い分けについてが、今回の主な内容です。

基本的には、これまでの復習に近いまとめの様な感じになるので、理解すること自体は、そこまで苦労はしないかもしれません。

その後は、実際の演奏の中で、頭と手を慣らしていただくだけです。

それでは、やっていきましょうか。

主に対象とする特殊スケールは、

- ・オルタード・ドミナント
- ・ディミニッシュ
- ・コンビネーション・オブ・ディミニッシュ
- ・ホールトーン

の4つです。

後は、メジャーのV7に対する基本のスケールとしてミクソリディアン、マイナーのV7に対する基本のスケールとしてHmp5↓辺りも、再度、軽く見ていきましょう。

このテキストでは、一応、オルタードなどのスケールを「特殊なスケール」と定義していますが、それは『ダイアトニックなスケール(チャーチ・モード)等と比べて、多くの場合、用途が限られている』と言う所から、そう定義しています。

上記のスケールは、多くの場合、4度進行するドミナント7th(V-Iと同等の流れでのVにあたるコード)の上で使う事になるので、そこで各スケールをどう見ていくのか？と言うのが今回の本題ですね。(※dimスケールは、Xdimのコードの上でも使いますが)

次に、V-Iに相当する進行は大きく分けると2種類あり、

- ・そのキーの1度のコードに対する純粋なV7  
(※例えば、CキーならばCM7に対するG7、AmキーならばAm7に対するE7)
- ・上記の、そのキーの1度のコードに対するV7コード以外に、臨時で出てくる、4度進行するX7  
(※例えばCキーの曲の中で、CM7-A7-Dm7-G7の様な進行が出てきた時のA7等)

に、分けることができます。

で、上の二つのパターンそれぞれに、メジャーのV-I(V7-I M7)、マイナーのV-I(V7-I m7)と、2種類あるので、計4種類ですね。

とは言え、先ほども書きましたが、そのキーの1度のコードに対する純粋なV7上で使うスケールは、基本的には、メジャーキーならミクソリディアンスケール、マイナーキーならHmp5↓スケールなので、4種類の内、2種類はもう知っている事になりますね。

それに加えて、ジャズ理論系の解釈として、ドミナント7thコードの上で、上記の特殊スケールが使えるたり、使えなかったりします。

ではまず、各パターンのドミナント7th上で使えるスケールを、一覧として先に見ておきましょう。それぞれ以下のようになります。

## 1、そのキーの1度のコードに対する純粋なV7上で使えるスケール

### ■1-1、メジャーキーのV7(CキーならG7)上で使えるスケール

(※以下、Cキーの場合、G7上で使えるスケール)

・基本→Gミクソリディアンスケール

・ジャズ系などのアドリブ理論、アレンジの場合は以下を追加

→Gオルタード・ドミナント・スケール

→#X(#V)ディミニッシュ・スケール(※G7上ならばG#(A b)ディミニッシュスケール)

→Gコンビネーション・オブ・ディミニッシュ・スケール

→Gホールトーン・スケール

### ■1-2、マイナーキーのV7(AmキーならE7)上で使えるスケール

(※以下、Amキーの場合、E7上で使えるスケール)

・基本→EハーモニックマイナーP5thビロウスケール(EHmp5↓スケール)

・ジャズ系などのアドリブ理論、アレンジの場合は以下を追加

→Eオルタード・ドミナント・スケール

→#X(#V)ディミニッシュ・スケール(※E7上ならばE#(F)ディミニッシュスケール)

→Eコンビネーション・オブ・ディミニッシュ・スケール

これらの、キーの1度のコードに対する純粋なV7の場合、そのV7が4度進行していても、していなくても、上記のスケール群をチョイスできます。(※詳しくは後半で)

## 2、その曲のキーの1度のコードに対するV7以外に、臨時で出てくる、4度進行するX7上で使えるスケール

### ■2-1、メジャー系のV-I

(※例、Cキーの曲の中で、CM7-A7-D7-G7の様な進行が出てきた時の、メジャー系のコード(D7)に解決するA7)

- ・ A ミクソリディアンスケール
- ・ A オルタード・ドミナント・スケール
- ・ #X ディミニッシュ・スケール(※A7 上ならば A#(B ♭)ディミニッシュスケール)
- ・ A コンビネーション・オブ・ディミニッシュ・スケール
- ・ A ホールトーン・スケール

## ■2-2、マイナー系の V-I

(※例、C キーの曲の中で、CM7-A7-Dm7-G7 の様な進行が出てきた時の、マイナー系のコード(Dm7)に解決する A7)

- ・ A ハーモニックマイナー P5th ビロウスケール(Hmp5↓スケール)
- ・ A オルタード・ドミナント・スケール
- ・ #X ディミニッシュ・スケール(※A7 上ならば A#(B ♭)ディミニッシュスケール)
- ・ A コンビネーション・オブ・ディミニッシュ・スケール

と、この様に分類されています。

簡単にまとめてしまうと、ドミナント 7th コードが出てきた場合、そのコード上で使えるスケールは、

### 1、キーの 1 度のコードに対する純粋な V 7

(※ドミナント・モーションをする、しないに関わらず)

・ 普通のロック、ポップスの様な、あまり複雑な響きを必要としない場合、メジャーキー⇒ミクソリディアン、マイナーキー⇒Hmp5↓

・ ジャズ系などで、複雑な響きが比較的許容される場合、メジャー系⇒1-1 の 5 つのスケール、マイナー系⇒1-2 の 4 つのスケール

### 2、そのキーの V 7 以外のコードで、臨時で出てくる 4 度進行する X7

(※その X7 が 4 度進行しない場合は、前回までのリディアン ♭ 7th の回を参照)

・ メジャー系の V-I (X7-XM7)⇒2-1 の 5 つのスケール、マイナー系の V-I (X7-Xm7)⇒2-2 の 4 つのスケール

と、言った感じです。

これらの分類を基本にして、状況(主にコード進行)に合わせて、各スケールを使って行くことになりますね。

では、それぞれのパターンの譜例を見ていきましょうか。

上記の一覧を見ると、相当な量があるように感じますが、実際は過去のテキストで8~9割くらいはすでに学んでいる内容です。

やったことが無いのはホールトーン・スケールくらいですね。ほとんど復習レベルですので気楽に取り組んでください。

まずは、『1、そのキーの1度のコードに対する純粋なV7上で使えるスケール』からやっていきましょう。

最初はミクソリディアンについてですが、これはメジャーキーのV7の上で使う場合、実質、そのキーの基本スケールと構成音は同じです。

Cキーで言えば、CメジャースケールとGミクソリディアンは構成音が同じです。なので、実際の演奏上ではスケールの切り替えは無い様なものですね。

#### 譜例1、key=C、I-IV-V-I、Gミクソリディアンスケール

CM7	FM7	G7	CM7
5 8	6 8	7 8	8 8
3	1	5-7	8
5	2	4-5-7	
4		4-5-7	
5		5-6-8	
3	1	5-7	

この譜例は、あえてメカニカルでスケールライクな雰囲気にしてありますが、ここで考えておきたいのは、この様な進行だと、実質Cメジャースケール1発の状態と変わらない、と言う事ですね。

なので、複雑な響きになることも無く、一般的な楽曲ではこういったスケールが選ばれます。

次に、マイナーキーのV7上でHmp5↓スケールを使うパターンですが、これはマイナーキーにおけるV7が、ハーモニックマイナーのダイアトニックコード由来であるのが理由でした。

この事から、マイナーキーの楽曲では、多くの場合、主にナチュラルマイナーを使い、時々、ハーモニックマイナーに切り替えて演奏することになりますね。

#### 譜例2、key=Am、I-IV-V-I、EHmp5↓スケール

この譜例の進行でソロを弾く場合、1、2小節目はA ナチュラルマイナー、3小節目がEHmp5↓(=A ハーモニックマイナー)、4小節目は再びA ナチュラルマイナーになります。(※譜例もそうになっています)

もっとジャズ的に、と言うか、解釈の制限を広げた場合、最初から最後までA ハーモニックマイナー等で弾く、みたいな事も出来ますが、それは今回の趣旨とは違うので割愛します。

以上の譜例1、2の様なスケールのチョイスが、メジャー&マイナー両キーのV7上での、一般的なハーモニーの感覚として基本になってきます。

続いて、その他のスケールのパターンですが、先の2例は、V-Iと言う1度のトニックコードに解決する進行で見えてきましたね。

そのキーの1度に対する純粋なV7の場合、V7の後に4度進行していなくても(1度のコードに解決していない場合)でも、先の一覧のスケール群を使うことが出来ます。

なので次は、V7の後に1度に向かわないパターンで譜例を考えてみましょう。

例えば、Dm7-G7のループがあった場合、これはドリアンモード的な進行ですが、このG7はトニックコードには解決していませんね。

ですが、Dm7とG7と言うコードは、Cキー(とAmキー)のダイアトニックコードなので、G7を本来は1度のコードに向かうドミナント7thと仮定し、Cキーの純粋なV7と見なし、その上で先に載せた様なスケールを使います。

次の譜例は、G7をメジャーの1度(CM7)に対するドミナントとして、1-1のスケール群の中から、GオルタードとGホールトーンを選んで弾いてみたものです。

譜例3、key=C、II m7-V 7、G オルタード&G ホールトーン

1、3小節目をDドリアン(=Cメジャースケール)、2小節目をGオルタード、4小節目をGホールトーンでフレーズを作っております。

譜面にある様に、16分のシャッフルのリズムでゆっくり弾いてみて下さい。バックにコード進行を流すと、オルタードやホールトーンのウネる感じが、より分かると思います。

さて、オルタードは過去に学びましたが、ホールトーンについてはまだやっていませんでしたね。

ホールトーン・スケール(whole tone scale)は、その名の通り、全音の間隔で全ての音が並ぶスケールです。

図、Gホールトーン・スケール

シンメトリック(対称的)に音が並ぶので、どの音もトニックとして見る事ができ、主なポジション(形)は上記の2種類になります。

インターバルは、**tonic**、**M2nd**、**M3rd**、**#4th**、**#5th**、**b7th** となり、全6音のスケールですね。

このスケールからは、上記の赤字の音から root、M3rd、aug5th(#5th)の aug(オーギュメント)コードが構成されるので、Xaug というコードが出てきたらその上でも使えます。

後は、#4th=#11th、#5th=b13th と、オルタード・テンション的にも見る事ができ、root、M3rd、b7th でドミナント7th 的な要素も含んでいるので、今回のテキストのテーマでもある様に、X7 のコード上でも使われます。

均等に音が並んでいるので、調性感の薄い、捉え処のない響きが特徴ですね。

ポジションも覚えやすいスケールなので、通常の練習の合間にでも弾いていると、いつの間にか勝手に覚えてたりします。

覚え方としては、上記の大きな2ブロックで見る事を基本として、その中でポジションを小さく分けて、運指がしやすい範囲をいくつか限定してみると良いでしょう。

先の譜例では、3、2弦の視覚的に分かりやすい範囲+1弦の音、と言う感じでフレーズを作っています。

『全音が並ぶ』と言う事を考えると、他のスケールとの兼ね合いで色々アレンジが思いつきそうですが、ここでその話をすると長くなってしまいますので、また別の機会にでも。

ちなみに、b7th はインターバル的には aug6th と見た方がいいんじゃないのか？と言う気がしなくもないですが、そう言った事に言及されている解説を見たことがないので、とりあえずは b7th として扱っておきましょう。

さて、ホールトーンの解説も終わった所で、話を戻します。

先の譜例3は、G7 をメジャーキーの V 7 と見て、CM7 に進む事を想定して(実際は進んでいませんが)、1-1 のスケール群の中からオルタードとホールトーンを使ったものですね。

これと同じ様に、マイナーキーの V 7(Am キー時の E7 など)の場合は、1-2 のスケール群の中から任意のスケールをチョイスすることが出来ます。

一応、どのスケールを選ぶのか？は、演奏者(もしくは曲の製作者)の自由なのですが、実際は曲調に合わせて、と言う事になりますね。



次に、『そのキーのV7以外のコードで、臨時で出てくる4度進行するX7』について見ていきますが、先に載せた1-1~2-2までの4パターンのスケール群は、実際は、メジャー同士(1-1&2-1)マイナー同士(1-2&2-2)が同じです。

この時出てくるドミナント7thコードは、楽曲の大本のキーからは外れたコードになるので、実質的には部分転調の様な状態になりますね。

例えば、CキーのI-VI-II-Vの、VIをVI7にした場合の進行である、CM7-A7-Dm7-G7みたいな進行の場合は以下の様に考えます。

このA7は、Cキーのダイアトニックコードには無いコードで、Dm7をIm7と見た場合のV7にあたる。

実質、key=DmのV-Iに部分転調(一時的な転調)をしているようなもの

このA7の上で使えるスケールが、上の譜例で言えば、解決先のコードがマイナー系なので、2-2のスケール群からのチョイスになります。

同じ様に、臨時で出てきたドミナント7thがメジャー系のコードに解決する場合は、2-1のスケール群から使うスケールをチョイスします。

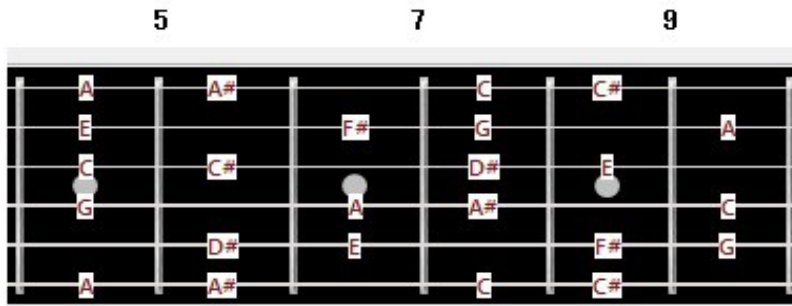
では、先ほどの譜例3では、オルタードとホールトーンのフレーズを見たので、次はディミニッシュとコンディミで見てみましょう。

コンディミは、スケールを使うコードのルート音をトニックに見てポジションを想定すればよいのですが、ディミニッシュの場合は、使うコードのルート音の半音上の音をトニックに見てポジションを想定します。

要するに、先ほどのA7の上で使うとしたら、コンディミの場合はAコンディミ、ディミニッシュの場合はA#(Bb)ディミニッシュになると言う事ですね。

と、こう書くと面倒な感じがしますが、8音構成のディミニッシュ&コンディミの両スケールを見た場合、AコンディミとA#(B♭)ディミニッシュは、結局は同じ構成音になりますね。

**図、Aコンディミ=A#(B♭)ディミニッシュ**



- ・ Aコンディミの構成音=A、B♭、C、C#、D#、E、F#、G
- ・ A#(B♭)ディミニッシュの構成音=B♭、C、D♭、E♭、F♭、G♭、G、A  
(※B♭ルートの方が比較的に見やすいのでそちらで表記しています)

パッと見分かり辛いですが、異名同音の表記を合わせると全て同じ構成音ですね。

なので、以下の譜例では、コンディミとの差別化を図るために、ディミニッシュの方は vol.58~61 の時にやった、ディミニッシュド・アルペジオ寄りなフレージングにしています。

後は、折角なので、CM7に解決する4小節目のG7の部分でも、それぞれのスケールを使ってみましょう(※G7上ではGコンディミ or G#ディミニッシュを使う)

**譜例4、key=C、I M7-VI7-II m7-V7、Aコンディミ&Gコンディミ**

スケールの響きを感じる為に、出来る限りバックングを鳴らし、16分ハネのリズムで弾いてみて下さい。

譜割りが細かいので、50~80位のテンポを想定しています。(※3、4小節目にはクロマチックアプローチも入れていきます)

**譜例5、key=C、 I M7-VI 7-II m7-V 7、A#ディミニッシュ & G#ディミニッシュ**

The image shows a musical score for guitar. It consists of two systems of music. Each system has a standard notation staff on top and a guitar tablature staff on the bottom. The first system starts at measure 10 with a CM7 chord and continues to measure 11 with an A7 chord. The second system starts at measure 12 with a Dm7 chord, continues to measure 13 with a G7 chord, and ends at measure 14 with a CM7 chord. The tablature provides specific fret numbers for each note in both hands (T for treble, B for bass).

こちらは、先ほど言った様に、ディミニッシュド・アルペジオ的なラインに、残りの音を足している様な感じにしております。

この譜例も、ゆっくり目のテンポで弾いてみて下さい。

ディミニッシュスケールのポジションは、指板のどの位置にトニックを見ているのか？が、ある程度分かる様にフレーズを作ったので、迷う様であれば過去のテキストを復習して下さい。

後、今回の譜例全般に言える事ですが、ハンマリング&プリング、スライドなどの指定がほぼありませんね。

この辺り、それらのテクニックを使うと、次のフレーズやポジション移動に繋げやすくなる部分も沢山ありますので、自分なりにフィンガリングを作ってみましょう。

(※ニュアンスが変わるので、それらをあえてしないのも手ですが)

全てに言える事ですが、最終的には、自分でフレーズを作って練習してみるのが、一番上達します。

慣れないスケールだと、ポジションが見えにくかったり、そのスケールの響きが感じられなかったりで、戸惑う事も多いですが、何事も経験なので、失敗を恐れずにオリジナルソロを作ってみて下さい。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼